

平成27年3月5日(木)林陽寺駐車場を7時30分に出発、途中、お弁当を乗せ、岐阜駅にて名古屋からのメンバーと合流し、一路奈良へと向かう。参加者は、22名。11時頃に奈良に入り、早速車中より、国宝東大寺転害門を、天平時代の伽藍形式を今に伝える三間一戸八脚門のかなり立派な門。数々の戦禍を免れ、東大寺創建時の数少ないオリジナル遺構を横目で見ながら、正倉院の茂みを横に見て、若草山ドライブウェイを若草山山頂へ。山頂には散策する人もなく雪がちらつく寒さであった。奈良公園の鹿の家族が数匹。眼下に東大寺や興福寺、遠くに平城京跡を見て、車中にて持参のDX弁当をいただく、車外でとの計画でしたが、鹿がおねだりにくるようであった。この山は、京都から奈良までを見渡せ、新日本三大夜景の一つとのこと。視界を遮るものがなく、余計な外灯もなく、夜景を思う存分楽しめるようです。山中は、草や低灌木はなく、ただ「アセビ」だけが美しい花を咲かせていた。やはり、毒気があるため鹿も食べないようだ。山焼きは毎年1月の第4土曜日6時30分点火との事です。



食事を終え、奈良公園の駐車場へ、12時30分にボランティアガイドの阿部、藤原さんと合流、班を2つに分けて4時間、東大寺と興福寺を拝観する。両氏とも熱心に情熱を持って説明に当たっていただいた。

今回の研修は、比叡山の最澄、京都の空海、熊野信仰に続いて、奈良の南都六宗の内華嚴宗の東大寺と法相宗の興福寺を訪ねる旅であった。南都六宗とは、奈良時代、平城京を中心に栄えた仏教の六つの宗派の総称であり奈良仏教とも言う。法相宗（興福寺・薬師寺）俱舎宗（東大寺・興福寺）三論宗（東大寺南院）成実宗（元興寺・大安寺）華嚴宗（東大寺）律宗（唐招提寺）を指す。当時からこう呼ばれていたわけではなく、平安時代以降平安京を中心に栄えた「平安二宗」（天台宗・真言宗）に対する呼び名である。当時はまだ寺院ごとに特定宗派を奉ずる寺院は少なかった。現在華嚴宗の総本山とされている東大寺において、平安時代には別院として真言宗の「真言院」が置かれ、勅命により空海が別当（寺務を統括する長官に相当する僧職）に任じられ、次第に密教の影響を受けていくことになる。又、当初これらは、法相衆・華嚴衆等と、「衆」の字を充てていたが、東大寺の大仏が完成した頃（748年頃）には、現在のように「宗」の字が充てられるようになったといわれている。



二月堂

奈良といえば大仏さん、大仏は奈良の象徴です。その大仏を祀っているのが、東大寺の金堂・大仏殿です。深く仏教を信じた聖武天皇は、仏のめぐみによって政治の不安を解決しようと考えました。国ごとに国分寺を建てることを命じた天皇は、743年（天平15）盧舎那仏をつくる詔を出し、「一枝の草、一にぎりの土」をもって大仏づくりを助けるよう、全国民に呼びかけました。これに答えて、

行基も弟子たちをひきいて協力しました。7年の年月を費やして749年(天平勝宝元)に大仏が完成、つづいて大仏殿もできて、752年(天平勝宝4)に開眼供養の法会が行われました。本尊は、毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)とも呼ばれ、華嚴宗の教主とされるが、この名は釈迦牟尼仏の別名で、世界を照らす仏・光り輝く仏の意味である。

南大門の正面に中門と回廊を配して大仏殿を囲み、その前方左右に七重の東塔と西塔が立っていました。大仏殿の後ろには僧坊に囲まれて講堂があり、その東に食堂を配していました。東方の山地に法華堂・二月堂、西方には戒壇院、西北方に正倉院がありました。東方を除く三方に築地をめぐらし、南面と西面に三つの門を開いていました。南面の中央が南大門、西側のいちばん北の門が転害門でした。



転害門

平安時代以降も、全国寺院の総本山として勢いを保ちましたが、1180年(治承4)、平氏の焼討ちにあつて、大仏もろとも大仏殿が焼け落ち、正倉院・法華堂・鐘楼・転害門などを除いてほとんどの堂塔を焼失しました。復興事業の中心になったのは重源でした。宋の工人陳和卿の協力も得て、1185年(文治元)大仏の修造を完成、宋から大仏様という新しい建て方を取り入れて1195年(建久6)に大仏殿を再

建しました。4年後にできた南大門は、大仏様をいまに伝えるものです。

1200年(正治2)に新しく開山堂が建てられ、数年後鐘楼が豪快な構えに建てかえられました。一方、法華堂は、南側の礼堂を大仏様に建て替えて正堂とつなぎ、均整のとれた美しい姿になりました。お水取りで有名な二月堂も焼け残ったのですが、1667年(寛文7)に焼け2年後に再建されます。1567年(永禄10)、松永久秀と三好三人衆との合戦で、大仏殿や戒壇院をはじめ諸堂舎が焼けました。寺僧らの努力にもかかわらず、なかなか再建には至りませんでした。

1684年(貞享元)幕府の許可があり、公慶によって復興事業がすすめられました。92年(元禄5)大仏の修造が完成、大仏殿も1709年(宝永6)に落成しました。大仏殿の再建には幕府の援助もありましたが、経費が十分でなかったため、創建当時よりは規模の小さいものになりました。間口が27メートルほど狭くなったのですが、それでも世界一の木造建築であることには変わりはありません。



二月堂の竹やり

月堂や三月堂を見学した。特に三月堂の乾漆不空羂索観音立像や塑造日光・月光菩薩立像など国宝ばかり、宝庫とはまさにこのことを言うのだというくらいの充実ぶりを誇る。毎年旧暦3月に法華会が行われたことから法華堂や三月堂と呼ばれるようになった。

二月堂は、旧暦の2月に修二会(しゅにえ)という大切な行事が行われているところからきている。東大寺のお水取りといえば関西では有名な行事で、お水取りが終

明治の初めには、屋根が傾くなどいたみがひどく、大修理が必要になっていました。明治の終わり1909年(明治42)になってやっと本工事に着手、13年(大正2)に竣工しました。昭和になって南大門や転害門などの修理も行われ、78年(昭和53)大仏殿の大屋根の瓦11万枚の葺きかえ工事が終わりました。

今回の研修では、国宝南大門、大仏殿、八角灯籠は勿論のこと、時間をかけて二



松明

われは春が来るといわれている。松明（たいまつ）の火の粉を浴びると無病息災ということで、大勢の人が詰めかける。松明は期間中毎日行われているのだけど、クライマックスは 12 日の夜で、この日が特に盛り上がりを見せる。二月堂は崖の上に建っていて、舞台造りになっている。松明の火の粉を浴びるため、参拝者はこの下からお詣りすることになる。



この行事の正式名は、十一面悔過（じゅういちめんげか）という。本尊の十一面観世音菩薩に祈る行。「悔過」とは、礼仏して罪過を懺悔（ざんげ）することにより、「天下泰安」「風雨順時」「五穀成熟」「万民快樂」等を祈願することをいう。修二会というのは、二月に修する法会という意味。「お水取り」というのは、若狭井（わかさい）という井戸から観音様に供えるお香水（おこうずい）を汲み上げる儀式からきている。



閻伽井屋

若狭の遠敷明神は、ある年、奈良の東大寺二月堂の修二会で神名帳を読んで全国の神を招いたが、漁で忙しかったため遅刻してしまった。そのお詫びとして、二月堂の本尊である十一面観音にお供えの閻伽水を送ると約束したという。鵜ノ瀬と呼ばれる淵は、二月堂の若狭井に通じているとされ。旧暦 2 月(毎年 3 月 2 日)には、ここで、二月堂に水を送る「お水送り神事」が行われる。その水を受けとる祭事が二月堂の「お水取り」である。

他に、四月堂もあり、毎年 4 月に法華三昧が行われるので「四月堂」と言われています。三昧堂または普賢堂とも言われます。本尊は、木造千手観音立像（国重文）。一月堂は、東大寺境内にはなく、京都府の最南端で奈良県との県境にあり、神が宿るとされた笠置山。その山中に、笠置寺はある。創建は諸説あり定かではないが、約 1300 年前にさかのぼるともいわれ、修験道の霊場としても栄えた。東大寺の北東、直線距離にして約 12km に所在し、昔から東大寺の鬼門よけとして南都を守り続けてきた。ここが一月堂と言われている。かなりの時間を東大寺に費やし、奈良公園を歩き、国立博物館の前を通り、興福寺東金堂に向かう。

興福寺は、南都六宗の一つ、法相宗の大本山の寺院である。南都七大寺の一つに数えられる。藤原氏の祖・藤原鎌足とその子息・藤原不比等ゆかりの寺院で、藤原氏の氏寺であり、古代から中世にかけて強大な勢力を誇った。南円堂は西国三十三所第 9 番札所である。「古都奈良の文化財」の一部として世界遺産に登録されている。

鎌足の子不比等の発願で氏寺として創建された。中金堂ができて間もなく、官寺なみの扱いを受けることになり、その後 721 年（養老 5）に北円堂、726 年（神亀 3）に東金堂と五重塔、734 年（天平 6）に西金堂が建てられて伽藍がおおかた整い。そして、平安時代の初め 813 年（弘仁 4）には、藤原冬嗣が南円堂を建てます。



藤原氏の力が大きくなるにつれて興福寺も勢いを伸ばし、伽藍の外に一乗院・大乘院などの子院がつくられていきました。

1180 年（治承 4）の平氏の焼討ちで、堂塔はことごとく焼けましたが、ただちに復興事業にかかり、14 年ばかりの間に堂塔が再建され、1210 年（承元 4）には北円堂も落成しました。1143 年（康治 2）



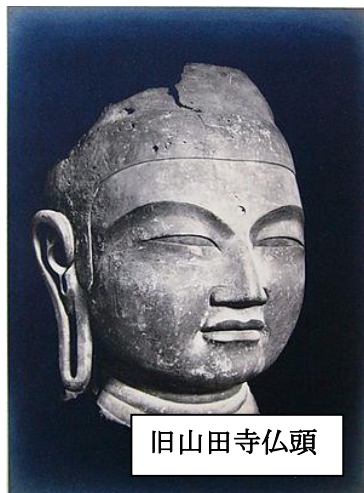
に創建された三重塔も、鎌倉時代前期に再建されたものとみられます。1411年（応永18）東金堂と五重塔が雷火のために焼失しましたが、東金堂は15年（応永22）に、五重塔は26年（応永33）に再建されました。

1717年（享保2）、金堂から出火して、東金堂・五重塔・北円堂・三重塔を残して大半の堂舎が焼けてしまいました。西国三十三所札所だったので、南円堂だけはほぼ元どおりに再建されました。明治維新の神仏分離で、興福寺はいちじ空家同然になり、1872年（明治5）、中心の堂塔を残して他の諸院の堂舎や土塀がとりこわされ、五重塔が売りに出されたりしました。1881年（明治14）に再興の許可があり、寺としての形もしだいに整っていきました。1998年（平成10）から、壮大な伽藍の復原整理事業がすすめられています。今年、興福寺は創建1300年の記念すべき年でした。

五重塔（国宝）は天平2年（730年）、光明皇后の発願で創建された。現存の塔は応永33年（1426年）頃の再建である。高さ50.1メートルで、木造塔としては東寺五重塔に次ぎ、日本で2番目に高い。

廃仏毀釈による破壊（ウィキペディアより）慶応4年（1868年）に出された神仏分離令は、全国に廃仏毀釈の嵐を巻き起こし、春日社と一体の信仰が行われていた興福寺は大きな打撃をこうむった。興福寺別当だった一乗院および大乘院の門主は還俗し、それぞれ水谷川家、松園家と名乗った（奈良華族）。子院はすべて廃止、寺領は1871年（明治4年）の上知令で没収され、僧は春日社の神職となった。境内は塀が取り払われ、樹木が植えられて、奈良公園の一部となってしまった。一乗院跡は現在の奈良地方裁判所、大乘院跡は奈良ホテルとなっている。一時は廃寺同然となり、五重塔、三重塔さえ売りに出る始末だった。五重塔は250円（値段には諸説ある）で買い手がつき、買主は塔自体は燃やして金目の金具類だけを取り出そうとしたが、延焼を心配する近隣住民の反対で火を付けるのは取りやめになったという。ただし、五重塔が焼かれなかった理由はそれだけでなく、塔を残しておいた方が観光客の誘致に有利だという意見もあったという。行き過ぎた廃仏政策が反省された1881年（明治14年）、ようやく興福寺の再興が許可された。1897年（明治30年）、文化財保護法の前身である「古社寺保存法」が公布されると、興福寺の諸堂塔も修理が行われ、徐々に寺観が整備されて現代に至っている。しかし、寺に塀が無く公園の中に寺院がある状態で、これは、この時の名残である。

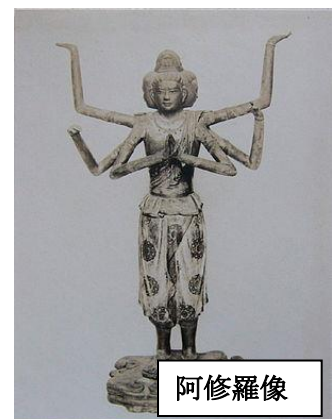
国宝館は旧・食堂（じきどう）の跡地に建てられた文化財収蔵・展示施設で、1959年に完成した。鉄筋コンクリート造だが、外観は旧・食堂を模した寺院建築風である。食堂は1874年（明治7年）廃



旧山田寺仏頭

仏毀釈のあおりで興福寺が荒廃していた時代に取り壊されている。内部にはもと食堂本尊の千手観音の巨像（高さ5.2メートル）が中央に安置され、仏像をはじめとする多くの寺宝が展示されている。2010年3月にリニューアルオープンし、従前に比べ展示点数が増えたほか、文化財に与える悪影響が少ないLED照明が採用されたことにより、多くの仏像がガラスケースなしで見られるようになった。

ご苦労様でした。



阿修羅像